2022 年 10 月 13 日（木）livedoor NEWS

“トランスジェンダー国会”戸籍上の性別変えるため体にメスを…「生殖機能失わないと性別変更できない」性同一性障害の特例法　見直し求め訴え

0

2022年10月13日 14時0分　TBS NEWS DIG

「僕は体の性は女性だった、しかし心の性は男性」「今の社会でカムアウトすることは差別の矢面にたつリスクがある。でも知ってもらいたい」トランスジェンダーの生きやすい社会を目指し、国会で初めての集会が開かれました。

写真拡大

【写真を見る】“トランスジェンダー国会”戸籍上の性別変えるため体にメスを…「生殖機能失わないと性別変更できない」性同一性障害の特例法　見直し求め訴え

■性別変更の”手術要件”なくして トランスジェンダーの訴え

生まれた性と性自認が一致しない”トランスジェンダー”。こうした人たちの生きやすい社会を目指し、10月12日、国会で初めての集会が開かれ、与党や野党の国会議員も出席しました。

Transgender Japan　畑野とまとさん
「性別変更に関する法律であるとか、就労差別であるとか、就学差別であるとか。この現実を知っていただきたい」

彼らが主に訴えたのは、性別の変更に関する法律の見直しです。

現在の法律では、「性同一性障害の特例法」で戸籍上の性別変更が認められていますが、

▽18歳以上である
▽現在、結婚していない
▽未成年の子どもがいない
▽生殖腺や生殖機能がない

などが、要件として求められています。

ところが、そもそも法律の前提となっている「性同一性障害」の扱いそのものが大きく変化している現状があります。

WHO＝世界保健機関は、けがや病気などのリストを2019年に改定。「性同一性障害」をこれまでの「精神障害」の分類から除外し、名前を「性別不合」に変更したのです。

ヒューマン・ライツ・ウォッチ　土井香苗さん
「世界は非常に大きく動いたということがあります。（特例法は）残念ながら非常に遅れたモデルというふうになっています」

現在の特例法で、当事者が特に見直しを求めているのが、生殖能力をなくす手術を受けなければ性別変更ができない点です。

■「手術を望まない」卵巣摘出には身体と金銭面のリスクが

鈴木げんさん（47）
「僕自身は卵巣の摘出手術を望んでいません。僕は今この身体のまま、戸籍の性別変更を望んでいます」

幼い頃から「女の子」とされることに苦痛を感じていた鈴木げんさん。

ホルモン療法や乳腺の摘出手術などを行い、いまは男性として生きています。

戸籍上の性別を変更するためには、卵巣を摘出する必要がありますが、
鈴木さんは、身体と金銭面のリスクを負ってまで手術する必要性を感じないと話します。

鈴木げんさん
「卵巣があってもなくても見た目は何も変わらず、自分は男であると確信しているので、この手術は自分には必要ないと思っています。これら（手術）のことは自分で決められるはずのことです」

中には、戸籍上の性別を男性に変えるため、卵巣や子宮などの摘出手術を受けた人もいます。

集会に参加した当事者（30代）
「1か月くらいは仕事ができないとかはあるので、時間とお金と命を懸けてまで本当にやらなきゃいけないことなのかっていうのが。やらなくて済むのであれば、これからの子たちにはそういう選択肢があると伝えたい」

■「学校に行きたくない」子どもたちからも切実な声
集会では、トランスジェンダーの子どもたちの切実な声も紹介されました。

子どもたちのメッセージ動画
「自然な自分でいられるように」

「自由で選ぶ権利を」

「自分らしく！」

子どもたちは、こんな言葉を口にしたそうです。

園児
「女の子として通わないといけないのなら、小学校には行きたくない」

小学1年生
「特別な配慮をしてほしいのではなくて、ただ自分を生きることに安心したい」

「より生きやすい社会を実現してほしい」。トランスジェンダーの人たちの願いです。

Transgender Japan 浅沼智也さん
「自分の体は自分で決めるものであって、性別を変更するために『生殖腺をなくしなさい』『外性器の状態を自認する性に近づけなさい』と国が決めることは本当に人権侵害だと思っているので早急に変えていただきたいと思っている」

■トランスジェンダー、女性…当事者が政治に

小川彩佳キャスター：
ここからは若者の政治参画を促す団体「NO YOUTH NO JAPAN」の代表でジェンダー問題などを発信している能條桃子さんに加わっていただきます。よろしくお願いします。

国山ハセンキャスター：
10月12日行われた「トランスジェンダー国会」で聞かれた当事者たちの声を紹介します。

40代
「戸籍上の性と性自認が異なり困難。病院などに気軽に行けない」

小学1年生
「かわいい格好をしたいけど止められ、大きくなるまで男の子のフリをする」

30代
「時間とお金と命を懸けてまで手術しないと性別変更できない」

などと話しています。やはり皆さん、自分の性別も、自分の体も自分で決めたい、という思いですね。

小川キャスター：
こうした声がトランスジェンダー国会で届けられることになったわけですけれども、能條さんはどうご覧になりましたか？

能條桃子さん：
例えば性別を変更する時に、自分の生殖機能を絶対になくす、ということを強制しなければならないとか、成人している子どもがいる場合はできないとか、国が強制するということが、国際的に見た時にかなり遅れているという中で、日本がこれを続けてきてしまった現状は、やはり日本の政治がこういう分野にすごく無関心で来てしまったからなのかなと思います。

そういう意味で今回『トランスジェンダー国会』ということで、国会議員の方々にこういう問題があると知ってもらう機会をまず作れたのは良かったのかなと思います。

小川キャスター：
まずは、当事者が国会に直接こうして届ける機会があったのは非常に意義深いことですよね。

国山キャスター：
そんな中で能條さんは、8月に「FIFTYS PROJECT」を立ち上げています。これは20代30代の女性やジェンダーマイノリティの議員を増やすことを目的としていて、選挙への立候補を支援する取り組みを行っています。

具体的には「2023年4月の統一地方選挙で20代30代の地方議員の女性比率を3割に増やす」という目標を掲げています。

女性の政治参加について見てみますとこんなデータがあります。

「ジェンダーギャップ指数・政治分野」（世界経済フォーラム発表・2022年）

1位…アイスランド
2位…フィンランド
3位…ノルウェー
139位…日本

▼順位が低いほど男女の格差が大きい

146カ国のうち139位とG7の中でもダントツに低いということが言えます。

小川キャスター：
ここまで開きがあるというのは愕然とするものがありますけれども、この状況について能條さんはどんなふうに捉えてらっしゃいますか？

能條桃子さん：
まずやはりこの「ジェンダーギャップ」であるとか「女性の政治参加」と言ったときに、その”女性”というところに、ちゃんと”トランス女性”も含まれるということも大事だと思いますし、二元論に陥らないというのは大事だというふうにまず思います。

でもやはり同時に、146か国中139位という事実に、「本当に日本は先進国と言えるのか」というくらい遅れてしまっていると、現状認識する必要はあると思いますね。まずはそこが変わっていかないといけないので、「女性比率」というところに一つ視点を置くというのは、私はすごく大事だと思っています。

また同時に、今回私が立ち上げた「FIFTYS PROJECT」は20代30代に限定して、地方議員から増やしていくという活動をしているんですけど、それはやはり地方や自分の自治体、身の回りのところから変わっていかなければ、なかなか国も変わらないというところがあると思っています。

小川キャスター：
女性を巡る問題もそうですし、トランスジェンダー国会もそうだと思うんですけれども、当事者の方が声を上げる場所が提供される、機会が設けられることの大切さというのをどんなふうに感じていますか？

能條桃子さん：
当事者がいるということだけ進むっていうことが若者政策についてもありますし、ジェンダーの話でもあると思いますね。例えば2021年の衆議院選挙の時くらいからジェンダーの話などは、政治の分野では以前より使われるようになっているかなと思うんですけども、「時代が変わってきてる」というふうに楽観的に見られるのかというと、私はまだそういうふうには思えていません。

例えば自治体の議員は今、日本全体の男女比率でいうと、女性は15%ぐらいしかいないんですけど、実は20代30代を見ても2割を切っていて、そんなに変わっていない。私たちの世代でも変わっていないなら、これから先もずっと続いてしまうのではないかと思っています。まずは足元から変わる。そして一つずつ、やはり次の世代のために変えていかなければという思いはありますね。

小川キャスター：
そのために私たち一人一人がまずできることは何があると思いますか？

能條桃子さん：
「投票」というところもそうだと思いますが、「政治参加」は別に「投票」だけではありません。現在は25歳以上であれば立候補するという選択肢も持てますし、あと同時に候補者や政治家の周囲をどういう人たちが取り囲んでいるのか、というところで、どういう政策をやるのか、どういう人たちが受かりやすいのかっていうのが決まっていくと思うんですよね。なので普通の人たちがもっとみんなで政治に参加していくというふうになれば変わっていくのかなと思います。

小川キャスター：
とにかく、あらゆる”当事者”が声を上げやすい環境を作っていくということが大切ですね。

能條桃子さん：
そう思います。